

パフォーマンスと癒し

松井 洋子*

Performances and Healing

Yoko Matsui

SUMMARY

Healing and expressing are in a mutual relationship. When a person confronts his / her own hurt and heals it and then expresses it in front of others, that person is healed more deeply. I preside over a body-mind workshop group, named KARAKORO WORKSHOP, and its members have given various performances for several years. In the performance which we gave at the meeting last June, the performers expressed their inner children. In their childhood they were badly hurt by the violence of their parents. They recalled and focused on their experiences and emotions, and reconstructed them as a drama, and gave the drama on the stage. Through the process of making the performance, how did they heal themselves? And what questions did they try to shoot to our society? Those are what I intended to make clear in my paper.

キーワード

自分の癒しは社会の癒しに通じる

Healing ourselves leads healing our society.

自分を癒す時、他者の痛みに共感する回路が開ける

When we heal ourselves, we can get open the way to sympathize with others' hurt.

いま、医者に必要なのは患者になる勇氣

What a doctor needs to do now is to associate with patients.

* 大阪からだとこころの出会いの会

I

「……列車が京都にさしかかった頃です。歌が聞こえてきたんです。泉谷しげるの『春夏秋冬』でした。『今日ですべてが終わるさ、今日ですべてが変わる。今日ですべてが報われる。今日ですべてが始まるさ』っていうフレーズが……。この歌は僕の人生を歌っている、そう直感したんです。そのとき、隣の席に中年のおばさんが座ってきました。ぶさいなくなぐせに気取っていてまるで母親でした。今日ですべてが変わる！ そうだ！ こいつに向かって叫ばない限り、僕の人生は始まらないと確信しました。思いきり大声で『馬鹿やろー！』と叫びました……」

私はいま、アリス・ミラーの著作と同じタイトルのパフォーマンス「魂の殺人」を客席で観ている。クライマックスを迎えた舞台では、精神科医に扮する伸が、自分の傷ついたままの内なる子供——インナーチャイルド——に遭遇するシーンへと一気に突き進む。

医学部の学生の伸は、精神科医を目指している。彼は、約3年前、列車の中で錯乱し、精神病院に入れられた経験をもっている。伸は以前から、中年で太った女がそばにいただけで、自分の母親のイメージと重なり、ムシズが走るような不快感を禁じえなかった。彼の母親は、太っていて、たいてい不機嫌であった。幼い伸は、そんな母親に邪険に扱われたり、突然ヒステリックな肉体的・精神的な暴力を受け続けてきた。

舞台上で上演しているのは、私の主宰する“からころ”こと大阪からだところの出会いの会のパフォーマンス。ここは日本保健医療行動科学会の会場だ。観客は学会の性格上、医者・看護婦・教育者たちが多い。このパフォーマンスは数か月前、京都で行ったもので、再度練り直したもの。演出を手がけている私は、本番は客席にいることが多いが、舞台上でパフォーマンスが始まると全編ハラハラ、ドキドキのしどおしとなる。それは、皆がうまくやれるかどうかと

気がかりだけでなく、演じているメンバー1人1人のインナーチャイルドが生々しく現れてきて、その内容をよくよく知っていても胸にこみあげてくるものがあるからだ。

このパフォーマンスの出演者15人は、全員が子供の時に親から感情的な暴力、あるいは親の無自覚的な暴力を受けた経験をもっている。そして、その過去の傷に向きあい、子供の頃の叫びを抑圧した経験が、いかに大人になった現在に影を落としているかに気づき、その傷を癒すことを“からころ”のワークショップの場で取り組んできた。

子供に対する大人の無自覚的な暴力を許しているのは、大人の自己正当化である。冷静な判断からはほど遠く、きわめて感情的に子供に暴力をふるっている親たちも、それは「子供のため」だと思っている。あるいはそう思いたがっている。その証拠に、親があまりにもヒステリックに子供を叱りつけているのを見かねて注意して、「子供のしつけに他人が口を出すな!」と、いっそう逆上して説教されたというのはよく耳にする話だ。

実際に殴ったり、蹴飛ばしたりという肉体的な暴力だけでなく、脅迫、冷たい目つきで子供をにらみつけること、1人の子供を可愛がり他の子供をのけものにする、何時間あるいは何日も口をきかないなどの仕打ちも、子供にとっての親の暴力だと私は考える。

私が行った「親と教師のワークショップ」で、この暴力の実像がかなり明らかになった。親の子供に対する暴力の背景には、主人と奴隷の関係があるということなのだ。それは、親に扶養される子供は、親の言うことに絶対に服従しなければならないという、親の(多くの場合)無自覚な思い込みに支えられている。“からころ”のメンバーで、暴力をふるった経験のある親たちが心の深層を探っていた時、次のようなことが明らかになっていった。何が正しいことで何が間違ったことであるかは、親が決める……子供の自由な意思は、なるべく早い時期に、大人によってこわすべきだ……たとえどんな親、どんな教師であろうと、親や教師は子供から尊敬されるべきだ……子供は小さく、未熟ゆえに尊敬に値しない……大人の言うことを丸ごと飲み込み、服従することによって、

子供は正しく成長する……子供の欲望・欲求を無条件に満たしてやると、怠惰でいい加減な人間になる……。これはまったく大人に都合のよい、勝手な規範のもとに、当然の権利であるかのごとく、教師や親は子供を支配しようとしていることだ。単に感情的になって、八つ当たりの暴力をふるうというだけでなく、絶対的な力の優越性を見せつけたいという思いが、親の暴力の根っこにあるということにメンバーたちは気づかざるをえなかった。

メンバーの1人1人が親からの肉体的精神的暴力によって、自分が受けた傷に向きあい、その癒しのワークの体験を元にして、今回のパフォーマンス「魂の殺人」のドラマができた。1人1人の力強い演技を観ていると、私はからだところが熱くなり、彼ら彼女たちのワークのシーンが鮮やかに甦ってきた。“からころ”というワークとは、主としてワークショップの場で、まわりの人々の共感に支えられつつ自分自身の問題に向きあい、それを乗り越えていく作業である。

II

パフォーマンス「魂の殺人」は、精神科医の診察室から始まる。マサユキ扮する患者が、精神科医の診察を受けている。

医者が横柄な態度で「何か変わったことはありませんか？」とたずねる。マサユキは、おどおどした態度で「ありません」と答える。医者は何度も同じ質問を繰り返すが、マサユキは虚ろなまなざしのまま、「なんにもありません」と続ける。「それじゃ診察になりませんね」と医者はあきれたように言う。

突然、マサユキがわなわなと震え、激しく脅えたように黙り込む。幻聴にとらわれたのだ。「マサユキ！ 何してんの！ また泥つけた足で縁側にあがって汚れるでしょう!!」と、母親の声がどこからか聞こえてくる。「お母さん」と椅子から滑り落ちながら、あえぐように叫ぶマサユキ。「黙りなさい！ 悪い子はお仕置や！ 逆さづりにされたいの！」と母親の恐ろしい声が響く。「許して」と耳を押さえるマサユキ。「どうしたのですか？ ……私は何もしていません

よ」と医者が当惑したように言葉を返す。妄想と、現実の診察室のいらいらした調子のやりとりが入り交じり、舞台は混沌としていく。ますます、怯え、取り乱していくマサユキ。「もうイライラするなあ！」という母親の声に続いて、バシバシッと叩く音と子供の泣く声が聞こえてくる。「泣くな！ うるさい!!」「叩くな！ 叩くな！ 僕は悪くない！ 叩くな！ 近寄るな！」マサユキの妄想は頂点に達する。彼は手足をバタバタさせ、パニックを起こし精神科医にすがりつく。看護婦が出てきてマサユキは医者から引き離され、あっけなく連れ去られる。

会社員のマサユキは子供の時、ヒステリックな母親から激しい折檻を受けた。4、5歳の頃、母親は怒るとマサユキの手足をひもでくくり、庭にあった貯水用の瓶（かめ）の中に足首を持って逆さづりにして揺さぶったという。マサユキはこの瓶を底なし井戸と思い込み、手を放されたら死ぬと怯えきっていたのだ。たび重なる折檻を受けたマサユキは、知らず知らずのうちに母親の期待に応える“いい子”になっていった。

片方の肩を吊り上げ首を前に突き出し、斜にかまえたからだのマサユキは、“からころ”のメンバーたちが集うワークショップではいつも隅っこで息をひそめるようにおし黙っていた。マサユキは悲惨な目にあってきたにもかかわらず、自分が暴力を受けて育ったことをなかなか認められず、問題に取り組むことなく3年が過ぎた。しかし、他人のワークにつきあっているうちに、気持ちが揺り動かされ、自分と重なるところがたくさんあることに次第に気づいていった。ついに母親の折檻のことが彼の意識に大きく浮上してきた。それまで自分ではたいしたことがないと思っていたことなのだが……。

マサユキの育った家は貧しかった。足の不自由な母親が何かと苦勞している姿を見ながら育った彼は、自分が暴力をふるわれていたにもかかわらず、そんな母親に同情し、かばい続けてきた。そしてマサユキは、30歳を超えるまで家に縛られて、母親の元を離れられず、女とつきあうこともできないでいたのだ。 「足の不自由な母を1人にして淋しい思いをさせられないから」と自分に

いいきかせていた。しかし、彼はパフォーマンスに参加することによって、自分が母親から離れられないのは、過去に無条件に愛されず、かわいがってもらえなかった欠落感から、よけいに母親にしがみついていることが大きく原因していることに気がつき始めた。そして今、マサユキはようやく母親の元を離れ、人生の転機を迎えようとしている。

「新しい自分を生き直す。生まれ変わるといふ感じ」と、マサユキは現在の心境を語る。親元を離れるということは彼にとって大きな一歩だ。今からが自分の人生の本番だといふ感じに、高揚するものをマサユキは感じている。これから生きていく中でいろんなことが起きてくるだろうし、それらにどんなふうに対処して生きていけるかという不安と、本当の自分として生きていくんだという期待で胸をいっぱいふくらませている。

III

マサユキが看護婦たちに連れ去られると、次にサチヨ扮する雑誌記者が登場する。月刊マインドという医学情報誌の取材に訪れたのだ。

医者「どこがお悪いんですか?」「頭ですか!」とたずねる。雑誌記者を診察を受けに来た患者だと信じて疑わない医者は、しつように質問を続ける。「私は患者じゃありません」という記者と、医者の押し問答がしばらく続く。

医者「愛されてこなかったでしょ」

記者「私は仕事で来ただけで……」

医者「愛情をたっぷりもらって育ててないでしょ」

記者「仕事は女の自立のためで……」

医者「だから怖いんですよ。濃密な人間関係が。そうでしょ。はっきり言ったらどうですか。愛情がほしかったんでしょう。怖いんですよ。濃密な人間関係が! ごちゃごちゃ言わないで正直に言ったらどうですか!」

記者「そういうことは患者さんとやってください。私は取材に来ただけなんですから。だから母のことは言いたくないんです。母のことは聞かないでって

言ってるでしょう！」

記者のサチヨは医者ペースにすっかりはまり、冷静さを失い、彼女の隠されたインナーチャイルドが顔を出し始める。

記者「……母は母は……私の母は私が小さいときに離婚したんです！ それ以来、彼女は私と姉を育てるために女であることを捨てて、ただ母親としてだけの人生を生きてきました。私はそんな母に感謝しながらも申し訳ないと思いました。彼女がかわいそうだとも思いました。……だから、私は母の期待に応えようと一生懸命頑張りました。勉強はいつも一番で、ダダをこねたことなど一度もなく、母のグチを聞いて、母をなぐさめ、父がいなくても淋しい顔など見せたことはありませんでした。先生にはいつも『明るく元気がよくてとても母子家庭の子には見えないね』と言われました。反抗的な姉をいつも私がなだめて、母のご機嫌とりもしました。私はずっといい子でした。でも大人になってわかったんです。それは、母が自分で勝手に選んだ人生だったってことをね。私は申し訳ないなんて思う必要はなかったんです！ いい子なんてやらなくてよかったです！」と絶叫し泣きだした。

医者「ほらやっぱり患者だったんじゃないですか！」

記者を演じているサチヨ（32歳）は保母をしている。彼女が“からころ”にやってきたのは、今から7年前だった。いつもニコニコして、年齢には不相応ないわゆるフリフリの服を着たブリッコだった。おまけに何事も完璧にやらなければ気がすまない優等生タイプで、自分がいい子を演じていることに本人はあまりよく気づいていなかった。

そんな彼女が、自分の暗部に初めて触れたのは、保育園で自分がかかわっている2歳児を虐待している事実を目を向け始めた頃だった。“からころ”にやってくる1年前から子供への虐待は始まっていた。

他の大人がいると抑えているが、自分と子供だけになるとサチヨのからだの中から暴力的な衝動がムクムクとたち現れて、暴力をふるった。嫌がる牛乳をむりやり飲ませる……散歩に行く時、後から靴を踏んで前につんのめるように

倒れさせる……歯を磨く時、歯ブラシを子供の喉に突っ込んでえづかせるなど、人が変わったようになって子供を痛めつけた。サチヨのふだんのいい人ぶった仮面からは裏腹な、そんな虐待の事実が明らかになっていった。

いい母親、いい未亡人を演じている母親をモデルにして取り込み、サチヨは自分の気持ちを抑えて、“理想の自分”を演じ続けてきた。子供らしいいたづらをしたり、悪態をついたり、無邪気に反抗したりといったことを一切しないできた。だから、自分ができなかったこと——言うことを聞かない、反抗するなどのこと——を子供がすると、腹がたっていじめたくなるのだ。

中学までのサチヨは学校でも優等生だった。中学ではバスケット部で「キャプテンになる」という筋書きも描かれていた。しかし、サチヨよりもとうまい子が入ってきて、その夢も消えた。高校は進学校に入って見事に落ちこぼれた。それらのいらだちと無念さを、万引きをしたり不登校になってはらした。希望する大学はすべて、サチヨのいう三流短大に入った。実生活の中で、サチヨが描いていた優等生としてのアイデンティティが、すべて崩壊していったのだった。しかし、その後も表面的にはいい子の仮面をつけることで、自分とまわりをごまかして生きることはやめなかった。

サチヨは医学生と結婚した。しかし、それはあえなく破綻した。母親に気に入られたくていい子をしてきたのと同様に、男に気に入られたくて自分を偽り、ことごとく男に合わせてきたことも見えてきた。

自分が子供を虐待したこと、男との関係がうまくいかないこと、その必然性と背景をより深く知るために、サチヨはパフォーマンス「魂の殺人」に取り組んだ。セリフの中で「いい子をやってきて」のところで、サチヨは少しずつ自分の内に傷つき泣いている子供を見出していった。

記者のサチヨは医師に案内されて病室を見学する。髪を振り乱した入院患者たちが奇妙な遊びに興じている。最初は楽しげに見えた患者たちは、ささいなことで怒りだし、互いに傷つけあう。あげくに見学していた記者を、自分たちの母親と思い込み、袋叩きに……。

入院患者たちを演じているのは、小学校教師や保母たちが中心で、過去に親

から暴力的な扱いを受けた傷をもつ人たちだ。「俺にお灸をすえるな!」「ケチばっかりつけるな!」「八つ当たりするな!」「私を振り回すな!」彼女たちが叫ぶそれらのせりふは、かつて子供の時に叫びたかった叫びである。子供の時に抑えつけられた怒りや恨みは、未処理のままからだの中に蓄積され、大人になった時、弱者である子供たちに向かって反転された。保育園や学校で、サチヨ同様、目の前の子供たちを痛めつけたり、自分自身が鬱で苦しんだ経験を多かれ少なかれ彼ら彼女たちはもっている。

IV

精神科医の伸が虚空を見上げて語っている。「……診察では同じことを何度も質問され何度も話しました。列車の中で何があったか順を追って何度も……僕は1日も早く退院できるように、正常らしくふるまう努力をしました。医者は君の将来のためにカルテは白紙にしておくからと言って、空欄のままのカルテを見せました。彼は僕をなだめるために誠実さを捨てていました」。突如として陰から「伸! 泣くな! 蔵に放りこむぞ!!」という父親の声が聞こえてくる。「お父さん」と、医者は子供のように床にしゃがみこむ。そして、「出してよ! お父さん、許して!」と頭を抱えて哀願する。

やがて、顔を上げた医者は、鬼のような形相で「許さない!! 俺の前で泣き叫ぶ奴は絶対に許さない。お前ら全員ここにぶちこんでやるからな!」と、父親さながらに客席に向かって叫ぶ。

そして自分で冷静さを取り戻し、医者は記者に向き直って言う。

医者「ありがとうございます。あなたのおかげで自分の過去に向きあうことができました。いまからはあなたがこの白衣を着てください……私は退院手続きをします」

記者「どういうことですか?」

医者「あなたは患者です。雑誌記者というのはあなたの妄想です」

記者「えっ!？」

医者「新しい妄想を選び直すチャンスです」

記者「私はどうしたらいいんですか？」

医者「医者をやったらいいでしょう」

記者「そんな！」

医者「次の患者が待っていますよ」

記者「私には医者ではできません」

医者「患者を続ける勇気があなたにありますか？ 私はここを出て行きます。さようなら。お互い、二度と会いたくないですね」

「ちょっと待って……」と追いかけるが、記者は1人取り残される。その時、ノックの音……記者は意を決して白衣を着る。

記者「どうぞ」

実際に精神病院に入れられた時、伸は医者や看護婦から高圧的な扱いを受け、ひどく傷ついた。それは、彼が子供の時に親から受けた屈辱と同質のものであった。伸は、その経験から、治療をするうえで医者・看護婦・患者の垣根を超えたつきあいの大切さを、つくづく感じたという。医療現場において、医者と患者の壁を取り払い、人間と人間として向きあい、触れあうことから、患者が癒されることは事実である。そのためには医者・看護婦・教師・親などいわゆる強者が自分の傷を深く見ていくことが必要であろう。医者に一番要求されるのは、伸が主張するところの自らが「患者になる勇気」なのであろう。自分の傷に向きあい、それを癒し、乗り越えた人だけが、本当に人と深くかかわることができるのだ。その意味で、医者は一度患者になるくらいの勇気をもたないと、現実の患者と本当には向きあえない。「医者も人間であり、弱い面もあるし、病むこともあるという事実を受け入れることが大切だと思う」と、伸は力強く語る。

医者が自分の傷を封じ込めたままでは、その医者的人生は演技であり、患者へのやさしさやいたわりは嘘となる。私は、医者・看護婦・教師・親たちが、少しでも自分自身の傷に触れ、癒していく回路を見つけることの必要性を痛感

している。そのためには社会的な強者である大人たちが、いま一度、過去にたち帰り、自分の内なるいたいけな子供、傷ついた子供を癒していくことが大切だろう。

パフォーマンスは終わった。一瞬の沈黙の後、観客の大きな拍手が起こった。私は、熱い涙とともに、その拍手を聞いている。場が静かになり、観客たちは、私の登場を待っている。私はほとんど言葉がなく、「このパフォーマンスに描かれていることは、すべて、1人1人にとって本当のことです。自分自身の傷をさらけだし、ドラマ化したものです」と語った。再び大きな拍手が起こった。

観客の多くの目に涙が光っていた。そして何人かの人、「自分も過去の傷に向きあっていくことの必要性を感じた」という感想を後に述べられた。中には、「いまさら過去の傷口を開いてどうなるのか?」と疑問を出された人もいた。確かに、子供の時の傷に触れずにやりすごして生きていくほうがラクかもしれない。しかし、本人は気づかずとも、インナーチャイルドの抑圧された叫びがからだの奥底でうごめき、その人の人生に大きな影を落としていくことも事実である。なぜだかわからないが人間関係や物事がうまくいかない、同じ失敗を何度も繰り返す……そんな時、その人が目にしていない現実の背後で、多くの場合、インナーチャイルドの癒されぬ傷口から血が吹きだしているのである。ヒットラーは幼少時代、厳格でヒステリックな父親から恐怖と屈辱を味わわされ続けた。権力を握った時、彼の過去の恐怖と屈辱を罪もない無数の人々の上に反転したのはよく知られていることだ。自分が受けた傷や屈辱を癒すことなく封印し、からだの底にあるインナーチャイルドの声なき叫びを自らが抑え込む時、その人の魂は死にゆくのだろう。そして、魂が死にゆく時、恐るべき反転の噴出によって、人は限りなく残虐になりうるのかもしれない。

人は自分の問題に気づき、癒していく時に他者の痛みに共感する回路が開けてくる。他者への共感によって、自分自身の癒しがさらに深まっていき、定着していく。それが、“からころ”パフォーマンスをやることの大きな意味と意義だと思う。

自分自身の傷ついた状況をドラマ化し、舞台に投げだすことで客観的な表現

とし、観る人たちの中に問いを投げかけていくのである。

自分の癒しから社会の癒しへ。それが“からころ”パフォーマンスの究極的なテーマである。表現と癒しは、相互関係にあり、自分の叫びを社会へ向けて発信することにより、また、より深く自分が癒される。癒しのパフォーマンスは、限りなく愛の営みであると私は信じている。
